

2022年度GTセミナー 第56回保育環境セミナー 人的環境編②

第304号 2022年12月26日発行

ミマモルジュ挨拶

ホテルに宿泊客の様々な相談や
ご要望に応えるコンシェルジュがいる
ように、保育においても様々な
ご要望や悩みがあると思います。

「見守る」+「コンシェルジュ」=
ミマモルジュとして、保育に関する
ご要望にお応えしていけるよう
活動していきます。

株式会社ガガヤ 奥山卓矢

人的環境編②

2022年12月12日～14日に「第56回保育環境セミナー」
(人的環境編)を開催しました。

オフライン参加は約100名、オンライン参加は60施設を超える
お申し込みを頂きました。今回は、藤森代表から「人的環境」につ
いて考え方をお示し頂きました。

本誌含め、4回に分けて人的環境編をお送りする第2弾です。

【セミナー開催趣旨】

乳幼児教育は、その時期の特性を踏まえ、環境を通して行うものであることが基本です。たとえば、赤ちゃんにハイハイをさせようと思ったら、その手順を教えるのではなく、自分から移動したいという動機(欲しい「もの」が前方にあるとか、抱かれない「ひと」が少し先にいるとか)を持たせ、そこまで行くための距離「くうかん」が必要になってくるのです。そこには、もの、ひと、場(空間)が関わってくるのです。そのために保育者は、乳幼児の主体的な活動を促し、乳幼児期にふさわしい生活が展開されるように、子どもが自発的、意欲的に関われるように、物的・空間的環境を構成しなければなりません。

そこで子どもは、それまでの体験を基にして、環境に働きかけ、環境との相互作用を通して、豊かな心情、意欲及び態度を身に付け、新たな能力を獲得し、心身を発達させていくのです。今年環境セミナーでは、「くうかん」「もの」「ひと」という環境について具体例を通して基本から学んでいきます。

ギビングツリー代表 藤森平司(新宿せいが子ども園 園長)



2022 第304号
保育環境
セミナー
今、子どもに必要な
保育の「考え方」と
「環境」を学ぶ。

空間的環境編	物的環境編	人的環境編
7/4、5、6	9/5、6、7	12/12、13、14
くうかん	もの	ひと

保育環境セミナーは全編3日間の日程です

- 1日 概観学
- 2日 概観学 + 実践学
- 3日 概観学

第 56 回保育環境セミナー 基調講演（人的環境編）

保育環境研究所ギビングツリー代表 藤森平司氏（新宿せいが子ども園 園長）

目次

—新しい時代に対する保育方法—

—チーム保育の考え方①—

—チーム保育の考え方②—

—協力する生き物—

—臥竜塾ブログ記事より—

—おわりに—

—新しい時代に対する保育方法—

非認知能力は修学前、乳幼児教育によって培われるものです。これは本当にショックです。競争力が低下していますから、今は非認知能力をしようとしているが、ではそれをどう身に着けるかということです。これが必要な力。きょういくほうほうがついていないので、私が具体的につけるために4つ。先ほど言った4つです。

新しい時代に対する保育方法

- ①かかわりを大切にした保育（乳児から必要な子供集団からの学び）
- ②たてわりではない異年齢児保育（インクルーシブ）
- ③子ども主体の保育（子どもの参画・選択）
- ④チーム保育（職員集団と保護者と地域）

- ①かかわりを大切にした保育（乳児から必要な子供集団からの学び）

これからの保育

人が社会の中で賢明に生きるための社会的知性と人は、人と人との関係において感情、情動で働く社会脳が存在すると分かってきました。「社会脳における他人との同調する能力、傾聴する能力、共感的関心などの能力の高さを伴ったうえで、高い知力、学力を持ってこそ、始めて人はよりよい社会人としていけることができる。」（ゴールマン）

（動画での説明のため中略）

- ④チーム保育（職員集団と保護者と地域）

子どもは、職員のチームによって、多様な社会とのかかわりを学習すること（チーム保育）

チーム保育の形

- ・複数の目で子どもを見守る：子どもの姿、活動を多面的に、多様な価値観から支える
- ・子どもの活動を面で見守る：子どもの行動を一人の保育者の目の届くところで行わせるのではなく、子どもの活動をチームをもって、面で支える

・流れる日課：子どもが主体的に生活していくために、動線上に保育者が配置される（リーダー、サブ、アシスタント）

良いチーム

組織は、一つの社会です。その社会の中では、お互いに心の交換の有無によって善し悪しが決まります。そして、子どもの発達、職員の楽しさに関係していることが推測されます。それは、職員の楽しさが、子どもたちに伝わり、子どもたちは生活、遊びにおいて楽しさを感じ、そこからの影響を受けやすくなり、環境との相互作用により発達する特性において、より効果的に作用しあうようになるからです。

—チーム保育の考え方①—

チーム保育の一つの考え方が、学生さんに言ったことだが、学生が就職するまでの友達は基本的に、自分と気の合う人です。職場の同僚は気が合わないかもしれません、年齢も色々います。自分と合わないとストレスが起きます。しかしこれは逆です。気が合わないのは、チーム保育の考え方では、自分と違う見方をしてくれる人。自分が持っていないものを持っている人。そのためには、職場としては有難いことです。同じ人ばかりだと、偏ってしまいます。うちの園はお楽しみ会のプログラムがこっていて、ある園の職員さんが、「そこまで、こる必要はないのではないか？」と言われたそうです。どう答えていいかわからないと職員が言っているが、それを言った人は、たぶん、それを作るのが苦痛で、だったら、その人は作らなくていいと思います。じゃあ、あなたは何が得意なの？と言って、裁縫が得意なら、すべてのクラスの衣装を作っていいと思います。その代り、制作が得意な人が作ればいいと思います。気が合う人同士だと、制作を作る人同士が集まってしまったら、他のことできないですからね。子どもを相手にすることが好きだったら、作る間、出ているから子どもたちのことを見てとか、書類を書くのが得意なら、代わりに書いていいと思います。私は、チーム保育は、それぞれが違うからこそ意味があると思っています。ただし、そこには共通理念がないといけませんし、子どもが好きという気持ちがないとだめです。制作が苦手な人もいますよ。得意なことをすればいいと思っています。うちもそうですが、お楽しみ会で出し物をする。衣装からセリフや練習を担当がやるんですね。そんな必要はないので、衣装は得意な人が、全部のクラスをしますし、ピアノも得意な人がすればいいので、担任がする必要はないです。担任は基本的に、発想を出すことと、子どもたちの話し合いをする時の問題ですからね。チームですということ。組織という一つの社会の中での力は、お互いの影響し合う力は、個人の力に勝るとも劣ることはありません。そして、それは、お互いに影響し合うことによって、足して2になることから、それ以上の成果が表れるのです。そのために、チーム・メンバー全員に、意見や提案を求め、チーム・メンバー全員の後押しし、協力を促すチームワークが必要になってくるのです。

—チーム保育の考え方②—

うちの園の特徴で昨日、園ラインがあるが、職員室からシフト表が送られてきて、「明日の9時版2枠入れるクラスありますか？ありましたら、お知らせください」とラインが入った。345のクラス入れますよ！と出してきた。シフトでだれかがいなければ、誰かがどこかは入れますか？と出せばうちが出せると、全体が全体を支え合うのがチームの良さです。去年から始めたのが、先生が休んだら職員室にヘルプ要因が入っていたが、職員室のヘルプ要因は全クラス経験できますから、私からするとずるいと思っています。新卒の子が1歳の担任になったとしたら、休まないで頑張っていたら、1年間保育を体験しても、結果的に1歳児しかしたことがないです。これはせっかく1年いたら、1歳だけはないでしょうと止めて、例えば3歳の職員が休みました。誰かヘルプが必要でよとなったら、3歳児

にヘルプはいりたい人いますか？と募集して、他のクラスから私が行きたいですとなったら、行きたい人の空いたところに職員室のエルプ要因が行きます。ですから、すべての先生がいろいろなクラスを体験できるようにと言って、エルプを名乗り出制にしています。午後話すかもしれませんが、週案を立てるときに、私はあまり立てるのは好きではないですが、来週、人手がいる計画をします。クッキングや散歩を立てるときに、来週ヘルプが必要な週案をこの日に立てました、と皆に言うことで、「じゃあ、その日はうちから出せるように、先生が少なくてもいい週案に計画します」としています。全体の週案は、お互いの先生の数の調整ができるような調整をします。うちは国基準くらいしか職員がいない中でやりくりをしますので、ちょっと手が必要な計画をした時は、他のクラスはちょっと手が少なくてもいい計画をします。それは調理を含めてです。ちょっと行事食で手のかかるものをするので、誰か調理に入れる人がいたらとヘルプを出したら、他のクラスが先生が一人抜けられる週案を立てて、調理に入るように、全ての職員の中でやりくりをして、得意な人が名乗り出ます。私はこっちが得意だから見ますとか、どっちかどうではないです。うちの園は、平等は同じようにすることではなくて、全ての先生が自分の特性を生かせる機会を与えてあげること、それを言い合えること。一番難しいことだが理想は、その時に平気で断れる職員集団であること。ダメな時はダメと言える関係じゃないと、無理が来てしまいます。

—協力する生き物—

これは重要なことだが、たまたま人類の進化を見ることだが、ホモサピエンスの人類は、協力することが基本で進化しています。まず出産から人間の特徴が出ています。人間は一人では出産が出来ない。人間は直立で立つため、骨盤がおわん型になります。そうすると、赤ちゃんが生まれる産道が狭く、楕円になります。赤ちゃんの頭と楕円が同じ形で、そこから出てくるが、出てくると肩がぶつかります。頭が出たら90度回転させて、肩を出さないといけないので、お産婆さんのように、人の手が必要なんです。人の手がないと、出産できない。他の生き物は基本的に自分だけ出産できるが、人間は出産から協力することで出ている。人は一人では生きていけません。もう一つ離乳をすることがあって、何で離乳をするか。人類の特徴だが離乳をする。8ヶ月くらいから離乳をするがなぜか。一つは、授乳はお母さんしかしないです。子どもは、社会的な生き物なので、離乳をすることで、いろいろな人が、食事を与えることができるようになります。離乳の一つの意味で、いろいろな人が食事をできることとあります。食事を決まった一人があげるのは、NHKの本に書かれているが、チンパンジーだと言われています。お母さんだけがあげているのは、チンパンジーと言われています。人類は、いろいろな人が食事をさせる意味があると言われています。離乳のもう一つの意味は、次の子を産む準備です。離乳をしないと、次の子を産むための生理が起きない。生理が起きないので、次の子を産めない。数多く生むために離乳をする形態があると言われています。ブログに今書いているのがNHKでTV番組をしていたが、それを取材した取材記がある。ブログで取材記を解説しているので、そのところを見てみたいと思います。

—臥竜塾ブログ記事より—

2022年12月1日 [進化] 離乳の意味

ヒトが協力するのは出産のときだけではありません。子どもを育てていく長い過程にも、協力が重要なのだといいます。「赤ん坊の世話をする母親にはいつも助けがあります。自分ひとりの手で赤ん坊を運ぶ必要はありません。おばあさんやおばさん、おじさん、お父さんが子どもの世話を手伝ってくれます。ほかの動物の場合、母親だけが赤ん坊の世話をするのに対して、私たちは個人よりも集団で赤ん坊の世話をするという特徴があるのです。ヒトが無力で生まれてくる脆弱な赤ん坊を育てていけるのは、ヒトが文化的動物だからです」

いつからか、担当制といって、0、1歳児の保育で、一人の養育者が子ども一人ひとりに丁寧に関わることで、子どもは安心できるということをする人がいますが、人類が文化的動物であるから、ほかの動物の場合、母親1人が赤ん坊の世話をするのに対して、個人よりも集団で赤ん坊の世話をする特徴があるということをもう一度見直してほしいと思います。また、育児休暇といって、赤ちゃんが0～2歳児くらいまで母親だけで子育てをするような制度は、親のためには、その間仕事が休めるのはいいことですが、子どもにとっては、果たしてそのような環境は人類にとって不自然なことかもしれないのです。

さらに、離乳という行為も、母親の助けになるといいます。「ヒトの場合、授乳期間は長いですが、ほかの食料も与えはじめます。それが離乳ですね。この離乳では、母親が赤ちゃんに食料を与える責任を持っているのではなく、父親も、祖父も、兄姉も赤ちゃんに食料を与えます。さらに、群れのほかのメンバーも同様に、子どもに食料を与えることができます。これはほかの動物には見られないことなんです」この子育てを見ても、授乳が母親しかできないことから、離乳をするという意味は、その後の食事は、様々な人が食事をさせられるということにあるということです。ですから、育児担当制といって、離乳後の食事の介助を、一人の養育者だけからするというのは、やはり進化から見ると不自然なことのようです。

しかも、もうひとつのメリットがあったようです。「この離乳のおかげで、母親はすぐに次の妊娠に取りかかることができます。子どもが母乳に依存していないからです」じつは母乳を与えているあいだは、排卵が抑えられ、次の妊娠がきわめて難しくなっています。これは、母体の耐えられる負担を超えて妊娠しないようにする仕組みとなっているということです。そのことで、何が起きたのでしょうか。「ヒトはチンパンジーと比べて、たくさんの子どもを出産することができます。多産なのです」ヒトが多産と聞くと、まさかと思ってしまうかもしれません。少子化で悩む日本など、どういうことかという感じだと言います。でも、これは意識的に産まないだけだと言います。産もうと思えば、産める。私たちは霊長類のなかでは、生物としての多産能力が高いということです。それはチンパンジーと比較すれば明らかだと言います。

チンパンジーは5年間、大事に育てて、何とか立ち立ったら次の子どもを持ちます。そのサイクルを基本的には繰り返すのです。チンパンジーは50年ぐら生きますが、10代で子どもを産みはじめて、20代、30代、40代でも産むことができます。だから、いわゆる祖母という意味でのおばあさんはいません。人間のように、子どもを産み終わった女性がそれから長い人生があって、孫の世話をすることもないのです。(臥竜塾ブログより)

—おわりに—

ワンオペ育児はおかしいです。お父さんが参加するのは当然ですね。最近の話ではないです。いろいろ間人が関わって赤ちゃんを育てていくということが、本来の人間の在り方です。ひとりの人が背負わせると行き詰ってしまいます。ということで、チームとして子育てしていくのは、そういう意味もあります。人と環境の中で、大事なのが、子ども同士の関わりを作ること。(人と環境)。大人との関係の中で、大人がチームとして子どもに接する大人の環境が大事だということが、私が提案する保育の特徴です。

本稿は、2022年12月13日に開催した「第56回保育環境セミナー」の基調講演の内容をまとめたものです。

(文責/奥山卓矢)